

国分寺市障害者基幹相談支援センター事業

令和6年度 国分寺市相談支援スキルアップ研修 ネットワーク研修Ⅲ(児童)研修
研修開催報告書

日時	令和7年2月5日(木)午前9時30分~12時00分
会場	cocobunji プラザリオンホール
主催	国分寺市障害者基幹相談支援センター

1. 目的

- ・生きづらさを抱える児童とその家族への支援において、本人の成長や発達過程に寄り添った“かかわり方”をすることが、重要であることを理解する。
- ・家族を大切な協力者として捉え、家族に対して適切な“かかわり方”をすることで、家族の持つ対処能力を高められること、また、家族という身近な人間関係が安定することで、本人の安心安全につながることを学ぶ。
- ・支援関係者がともに学ぶ機会を持つことで、分野や種別を超えた支援ネットワークの構築を図る。

2. 講師

西隈 亜紀氏(特定非営利活動法人 東京フレンズ 理事長、日本社会事業大学 非常勤講師)

3. タイムスケジュール

9時30分~9時35分	開会挨拶
9時35分~10時35分	講師講演
10時35分~10時45分	休憩、質問用紙回収
10時45分~11時25分	グループワーク、発表
11時25分~11時55分	講師講評
11時55分~12時00分	閉会挨拶、事務連絡

4. 参加状況

参加人数:43名

分類	参加人数	所属機関
相談支援機関	12名	相談支援事業所、地域活動支援センター
障害児通所支援事業所	8名	児童発達支援事業所、放課後等デイサービス事業所
保育園	3名	保育園
障害福祉サービス事業所	4名	生活介護事業所、就労継続支援B型事業所 共同生活援助事業所
行政機関	7名	障害福祉課、子育て相談室、教育委員会

他、事務局(基幹)5名参加

5. 講演内容

西隈亜紀氏を講師に迎え、「家族全体をとらえたかかわり方」~“困っている”親と子に支援を届ける~をテ

ーマに、支援者のための家族支援についての講演と創作事例の検討を行った。後半はグループに分かれて、講演の内容に基づく感想の共有と家族支援に向けて取り組めること等について、グループワークを行った。

《講演の概要》

はじめに

大学卒業後、新聞記者として取材をしていく中で、対人援助職への転職を決意し、心のケアに携わりたいと精神保健福祉士の資格を取得した。その後、精神科病院に12年間勤めた。当時は、児童思春期病棟や小児精神科はほとんどなく、制度も整っていない中、困っている地域の方であれば受入れをした病院であった。思春期の若者を担当することが多く、知識を身に着けるため社会福祉士の資格を取得し、若者を対象としたプログラムを立ち上げ、働きながら大学院に入り、若者支援の研究をしてきた。病院を退職後、心のケアが必要な若者のためのグループホーム「キキ」を設立した。障害者総合支援法に基づく精神障害者対象のグループホームである。定員6名の有期限(3年)の通過型で、疾患名や状態は問わず精神科医療ユーザーの18~20歳代の男女を受入れている。

1. 家族は世界で一番難しい人間関係

家族は、ひとつのシステムだと言われている。家族の構成員が、影響し合い絶妙なバランスを保っている。家族内の揉め事や問題とされることは、家族の中で一番弱い立場の人が、何らかの「症状」として出すことが多いと言われている。例えば、両親の不仲を子どもが心配して不登校になったり、引きこもりになるなどである。

心のケアが必要な人の場合、今現在、本人が何か不具合を感じており、それが家族に関係している可能性がある。家族がいて、家族の中で暮らしている以上、家族との関係は少なからず関連があり、家族関係が変わることで、本人が成長・発達して次第に回復していく可能性が高い。子どもの問題を考える時は家族(多くは親)もセットで考えていく必要がある。家族問題に対応していくことで救われる人たちが確実にいる。

家族関係の難しさは、子どもは親に期待してしまうことにある。親だから「わかってくれるはず」、親が「自分のためにやってくれて当然」と思ってしまう。また、親しか頼れる人がいないと思込んでいることも要因の一つである。子どもは1人で生きていけず、親の価値観しか知らない。学校に行き、初めて親以外の他者の価値観を知ることになる。一般論として、心のケアが必要な子どもは、親が大好きである(執着している)ことが多い。親が本人の思いに答えてくれない、満たしてくれない時に深く傷つき悩む。これがエスカレートすると、親の気を引くために暴力・暴言、金品要求など屈折した形で愛情を求める。本人は、悪循環であることに気づかなかつたり、薄々気が付いていても、止められなくなっている。親への期待(執着)を諦められると別の道が開けてくる。

逆に親から見た子どもは、子どもだから「親の言うことを聞いて当然」と思っている。いつまでも「子ども扱い」をしたり、「あなたのため」と善意を振りかざし、親の思い通りにしようとする。親の立場であれば、子どものためと思うのは当然であり、期待をするのも当たり前だが、程度に問題がある。子離れできない親も多く、親が自分自身のために子どもを手元に置いておこうしたり、子どもが親離れしようとする親自身が不安定となる。母親に多く、育児が母親に委ねられている社会の現状が影響していると考えられる。

子どもと親、双方に共通していることは、家族だからとの思いからお互いに甘えや依存がでることである。仕方がない部分ではあるが、悪影響となる場合は、見過ごすことはできない。家族だからこそ、関係を断ち切ることが難しい。また、家庭は密室であり、外から見えにくい。自分の家族に問題を感じていても、恥ずかしいとの思いがありひた隠しにする。家庭各々に価値観があり、専門家の関わりを拒否する人もいる。また、困っている状態であることに当人たちは気が付いておらず、支援が必要だと思っても届きにくく、届けられない難しい家族がいる。

困っている状態に気が付いたとしても、助けて欲しいと言えない、言うのが苦手な人たちも多い。また、誰に、

どこに相談したら良いかわからない。市役所に相談しに行く発想が浮かんでも、行政窓口は縦割りで、わかりにくく、こんな悩みを相談して良いのかと自信がない人もいる。勇気を出して相談に行っても、嫌な思いをしたことがあると、二度と行きたくないと思ってしまうこともある。現代は、携帯電話が普及し SNS に問う時代となった。それ故に、リアルな人に向き合い相談するのが苦手な人が増加していることを危惧している。

家族の 1 人に関わった支援者が他の家族問題を発見することがよくある。家庭訪問をすると、見えてくるものもより多い。自分の担当や専門分野ではなくとも、必要な支援窓口を見つけ繋げて欲しい。子どもの支援は、子どもだけの支援ではなく家族全体を捉えて支援しないと解決しないことが多い。なぜならば、その子どもは家族の中にいるからである。

2. 創作事例から考える～こんな子どもに出会ったら？～

創作事例をもとに支援のポイントの整理をした。支援の方法は、一つではない。答えはないが、どんなことができるのかを一緒に検討できたらと思いつき組み込んだ。

実際、どのように支援をしていくかを検討する上で大切なのは、そもそも支援が必要でなければ、大いなるおせっかいであり、支援の妥当性を見極めることが大事である。自分たちがやるべきなのだろうかという思いや本来業務で手一杯の中、どこまで引き受けるのか悩むところである。しかし、結局は家族問題に介入しなければ解決しない場合も多い。問題や課題を発見したら、家族に介入する取っ掛かりとなり得る。1 人の支援者が家族を丸ごと抱えることはできないし、するべきではないので、関係機関につなげて欲しい。発見したことを見ないふりはしないで欲しい。「気になる」を自分の中だけで抱えていると自分が苦しくなる。共有することで、何か広がっていくかも知れないと思ってもらいたい。

3. 心のケアが必要な子ども支援のポイント

子どもは、成長発達していく。その為、大人の支援とは違う難しさがある。子どもは、悩みをうまく言語化する力が足りない。自分の心に何が起きているのかわからず、自分で自分を抑える力も弱い。これは、大人になってもあるかも知れないが、子どもや思春期の若者に非常に多い。言語化できないため、何らかの行動や症状という形で表現をする。これは、SOS である。子どもは、心身共に良くも悪くも成長し変化していく。幼児期は、何らかの障害があるか、性格や特徴なのか鑑別が難しいことが多い。思春期以降の中学生や高校生は、精神疾患の好発期と言われている。統合失調症の発症しやすい時期は、思春期の頃である。しかし、病気を発症しているのか、思春期特有の揺れなのか鑑別診断が難しい。誠実な精神科医であれば一度の診察で診断をつけることはなく、丁寧に経過を見ていく。

子どもの支援の難しさは、子どもは親の影響下にあり、親の価値観から逃れられないことである。家庭外との交流がないと、親以外の価値観を知らないまま育つことになる。生きている年数が少ないので経験値や情報量が少なく、経済的な理由からも親から逃れられない、親しかいないと思ってしまう。虐待されても親をかばったり、親が大好きで諦められず執着する。視野が狭いため、親の価値観で認められないと自分をダメだと思ってしまう。その為、自己肯定感が低く自信を持ってない。生きている年数が少ないため視野が狭くて当たり前である。子どもが悪いわけではない。まず、それをわかっていく。親とは違う価値観を伝えていくことが大切である。子どもだから何もわからないなどは絶対にない。考え悩み、絶望する。命は 1 度限りだと本当に理解していなかったり、将来に希望が持てず、自傷行為や自殺企図へとつながる。

薬だけでは、心の傷は良くならない。例えば、不登校の人がこれを飲めば学校に行けるようになる薬はない。専門機関につながっても「かわり」が必要で、良くなるまでに時間を要する。薬は、必要で適切に使うのが良いと思うが、それだけではない。特に、子どもや若者には、その後「どう生きていくか」に寄り添い考えていかなければならない。子どもにだけかわるのでなく、親をはじめとする本人を取り巻く環境を整え、学校など社会を変えていく必要もある。1 人の支援者の頑張りだけでは、限界がある。支援ネットワークで支えていくのが良

い。

思春期は特有の難しさがあり、支援者自身の思春期の課題を克服できているか、もしくは客観視できる程度にアイデンティティを確立できているかが関係している。クライアントに支援者自身の課題を重ねて見てしまうと冷静さや客観性を欠いてしまう。親世代の支援者は、自分の子どもと重ねて見てしまいがちである。思春期の支援では、傷つけられることもあり冷静にかかわれないことが多い。その難しさの中でも関係性を作っていくと、依存性が高まっていく。初めてわかってくれる人に会えたとの思いが強くなると、転移や逆転移の関係性になりやすくなる。

二者関係の構築、まずは仲良しになることを目指す。言語化が難しい人は、一緒に遊ぶ、片付けをするなど行動をともにする。グループホームでは、部屋の片づけを一緒にする。買い物と一緒にいく。ゴミの分別を一緒にやることで仲良くなっていくことをしている。周囲から否定されてきた人が多いので、受容的、支持的にかかわる。泣いたり怒ったり感情が揺れている時は、関係づくりの好機である。子どもだからと軽んじない。子どもは、大人をよく見ている。当たり前のことだが、約束を守る、間違えたら謝る。なぜ、あえて話しているかと言うと、自分の周囲の大人に謝ってもらった経験がない子どもが多いからである。大人の当たり前のルールをしっかりやるのが信頼につながる。かかわる相手の年齢に自分が同年齢であった時の感覚を思い出して欲しい。小学校 1 年生でも、たくさん考えて悩み、大人の顔色を伺っていたことを思い出す。これは、支援者として重要なトレーニングである。自分の昔を思い出して感覚を合わせていくことは、大事な技術の 1 つである。

「秘密」は、成長の証だと、子どもと親に理解を促す。子どもが小さければ親に何でも話をし、親も秘密を作るとなぜ言わなかったのかと怒る。成長していく中で、言わなくなる時があり、親に言うのは恥ずかしいけれど友達なら言えるなど、小さい秘密を微笑ましく思っている親なら良いが、怒る親がいたり、子どもが親に言わないと怒られるからと、のびのび話せなくなってしまうことがある。親に言えないことがあり、秘密を持つことは、あなたが成長した証だと子どもに伝えることと、親にはあなたの子育てが成功していることを伝えていくことが大事である。

子どもが親のことを悪く言って泣き喚いたとしても、支援者は親を批判することは子どもに言わない。共感して受け止めることは大切だが、支援者が親を批判すると子どもは複雑になる。

悩みを引き出そうとすると、なかなか話さない、話せない子どもは多い。家庭内のことであれば、親から外で話すなど言われている場合もある。簡単に他者に心を開かない子どもがいる。悪いことではなく、丁寧にさりげなく話を聞く。重要なのは、話したくなったらいつでもあなたの話を聞く用意があること、あなたの味方であることを伝え続けることである。

現在は、部署や機関、地域を超えて横の連携が重要だと言われている。現実的には難しくても、必要だという認識はあると思う。さまざまな機関に相談したり、一生懸命質問して多くのことを教えてもらった。迷った時は、まず相談してみることや情報共有をする。何かあってからでは大変という意識を支援者は持っている。

4. 家族支援のポイント

家族支援は難しくても、親の苦しみを傾聴、受容することが大切である。最初から虐待をする親はいない。虐待をするために子どもを産む人はいない。望まない妊娠で悩み迷ったり、子どもが自分の問題や課題を解決してくれると間違った考えを持つ人はいるが、虐待をしようと思っている親はいない。絶対に理由がある。親も悩んでいる視点で接することが必要である。虐待は、許されることではない。絶対に許してはいけないことだが、そこには何か事情がある。それにアプローチしていかなければ、虐待はなくなる。子育てについて、こんなはずではなかったと思ったり、自分を責めている親もいる。周囲からの言葉に親失格だと思っている親も多くなる。親にも、あなたは 1 人ではない、支援者がいるということを伝える。親は防衛が強く、自分を守るために子どもを離さないこともある。その場合は、無理強いせず、今後いつでも話を聞く用意がある旨と連絡先を伝えると良い。親が落ち着き心に余裕ができると、必ず子どもへのかかわり方が変化する。子ども支援と親支援はセツ

トと言われている。

親への支援は子ども支援より大変である。子どもが求めているのは、あなたなのだと言明して理解してもらえないが、なかなか大変である。親自身が問題を抱えていたり、共依存関係にある親子の場合は、親の面談は必須だが拒否する人もいる。現実的な制度を紹介するほうが受け入れやすいこともある。減免手続きや子どもを預かってくれるなどの制度紹介は効果が高い。子どもが良くなるために何ができるかを目的として、制度を紹介することは大きなきっかけとなる。

親子の分離を考える時に、施設入所はお互いのために良い面があると説明を尽して欲しい。強制的に親子分離をさせないといけないこともある。重い決断は、支援者が背負って欲しい。分離した後も親支援は続く。分離してこそ親が冷静になり再生できることもある。

5.まとめ

子どもとかかわる時は、家族全体を見る視点を持つ。家族のことで何か気になる点があれば、そこが支援のスタートとなる。家族支援は子ども支援であり、家族を支援することで、子どもの状態も落ち着いていく。本人が成長発達過程にいることを肝に命じ焦らない。可能性を諦めない。子どもを救うためには、専門性は大事だが、おっせかいな視点が必要な場合もある。法制度や機関、部署を越えて利用できそうな制度を検討し、あらゆる方向から支援を届けられるように考えて欲しい。子どもの安全と幸せのために、そして、親も幸せになって欲しいからである。

《グループワーク》

7グループに分かれ、講演の感想を共有、家族支援について話し合った。その後、グループ発表を行った。

《グループ発表》

グループ1

子どもを支援する立場だが、家族支援の大切さや切っても切り離せない部分だと感じた。支援をする中で、思春期の子どもの対応で課題となるのが性的問題である。性について、いつ誰が教えてあげれば良いのかという話がでた。

また、家庭の様子が見えない時の支援をどのように進めていけば良いのかという課題があり、学校への介入は不可欠であるが、学校との連携に難しさを感じている。学校関係者と福祉職の考え方の違いもあり、スクールソーシャルワーカーに間に入ってもらうことで、地域と学校をつないでもらうのはどうかとの意見があった。子どもが地域の中で育っていけるように各機関が一緒に取組んでいくことを検討していけると良い。

グループ2

当事者支援だけでは、どうしても難しい現実がある。その中でも、親とのかかわり方の大切さを痛感した。1つの事業所で抱え込むべきではないことと、どのようにつなぎ連携していくかを話し合った。一緒に考えていくという姿勢が重要で、それをどのように伝えていくか、投げかけていくかをこれから考えていくことを共有した。

グループ3

家族に介入している中での困りごとや、家族とのかかわりについて話し合った。家族各々に支援者が必要であったり、その中で本人の意思決定をどう進めていくのかの難しさを感じた。本人の意思を尊重していくのは当然だが、本人の意思が場面により変化することがあり、支援者側の判断のしにくさとなっているのではないかと。学校と福祉との連携は、子どもへの支援に対する時間軸や支援の幅の違いがあり、各機関との連携の仕

方について、議論できる場があると良いことを共有した。

グループ4

子どもや親へのかかわり方を具体的に知れて、とても勉強になった。家族全体への支援の必要性は理解しているが、子どもにとって親の存在の大きさや与える影響の強さを考えると、いろいろな関係機関とつながりを持ち連携していくことが大事だということを共有した。

グループ5

支援者が男性であると、母親へのかかわりで悩むことがあるが、関係性を少しずつ構築していくことが必要だと感じた。1つの事業所で抱えてしまうとパンクしてしまうので、関係機関との連携を心掛け、地域福祉コーディネーターや重層的支援体制整備事業を活用していくことも必要だと共有した。

グループ6

改めて家族を知ることや家族をアセスメントすることの大切さを振り返ることができた。理解はしているが、家族の問題にどこまで入り込んで良いのか躊躇してしまうとの悩みや葛藤がでた。まずは、信頼関係の構築、仲良くなる必要があり、そこに立ち返ることが大切だと話し合った。

連携の部分では、点ではなく、面で支えていくことをイメージできると支援者も少し楽になると感じた。事業所ごとで悩むのではなく、関わっている事業所で集まり、課題を共有することで、何か方法が見つかるのではないかとの意見があった。

思春期は、誰もが通過してきたはずだが、なぜか難しく感じてしまう。思春期の子どもへの支援について、今後勉強して深めていく必要性を共有した。

グループ7

親へのかかわりが難しい。各々の環境や背景が違う中、いつ誰が話をするかにより受け取りも変わってしまう。障害となると、性格や気質だと拒否されてしまいハードルの高さも感じている。どの時期にどのような話をするか見極めながらかかわっていくことの大切さを共有した。

《質疑応答》

Q: 子ども・若者と仲良くすることや、彼らに対しておせっかいであることとクライアントとのバウンダリーをきっちりしておくことの両立が難しく感じられるが、どのように気を付ければ良いか。

A: 本当に難しい。情熱は持ちつつ淡々とこなす。自分の支援の方針(考え方)で、ここまではOKだが、これ以上はやらないというラインを決めている。

Q: 子どもと親の支援は異なる機関が担うのが良いか。それとも、一つの事業所が担うべきか。

A: 同じ事業所でも、別の事業所でもどちらでも良いが、同じ事業所内であれば、子どもと親に別々の担当が付くと良いと思う。事業所の規模により、他事業所に頼む方法もある。1人の支援者が子どもと親の両方を担当するのは難しいと感じる。

Q: いかなる理由があっても子どもに手を挙げてはいけないことを理解してもらえない親への対応を知りたい。

A: 親も子ども時代に手を挙げられて育ったことで、その価値観を持っており、考えを変えることは本当に難しい。制度として話しをしてみたり、同じ立場の人の集まり(親の会)等に参加してもらえると良い。支援者が参加して欲しいと思っても、なかなか難しい面がある。

Q: 自分の主観で思いをぶつけてしまう支援者がいる(母なのだから等の母性神話)。多くの分野の支援者が関わる会議等で、このような支援者がいた場合、どうしたら気づいてもらえるか意見を聞きたい。

A: 各々の分野で考え方ややり方が異なるのは当然である。みな何とかしたいと同じ思いで集まっているので、伝えてよいことだと思う。会議の場だけではなく、普段から連絡を取り合い、顔の見える関係にしておく。

7. まとめ

令和6年度は、西隈亜紀氏を講師に迎え、家族全体をとらえたかかわり方をテーマに研修会を開催した。生きづらさを抱える子どもとその家族への支援について、家族全体を見る視点を持つ大切さと支援の土台となる考え方の理解を深めながら、他職種とともに考える機会として、対面での開催となった。

グループワークは、支援者同士の顔の見える関係づくりや連携・協力し合える支援体制づくりの一助となり、家族支援の重要性について共有する場になった。



8. 参加者アンケート集計報告

アンケート集計結果 **参加者：34名 アンケート回収：26名（回収率76%）**

1. 家族全体をとらえたかかわり方について、理解を深めることはできましたか。

良く理解できた	: 17名 (65.4%)
理解できた	: 9名 (34.6%)
どちらでもない	: 0名
あまり理解できなかった	: 0名
その他	: 0名

- ・ 支援の対象はクライアントであって、家族はわけて考えなければならないと思っていたが、クライアントとその環境に介入するというソーシャルワークの考え方からすれば、家族もアプローチすべき環境なのだと思います。
- ・ 保育園は比較的、家族の様子を感じることができると、家族丸ごと支援していきたいと改めて感じる事ができた。
- ・ 家族全体を知る事で解決の糸口や支援の優先順位等が見え、より円滑な支援ができると感じた。
- ・ 支援者の視点だけでなく、親の視点ではどういう思考になっているかなど、当たり前のように失念しがちなことを改めて気づき重要なことだと感じた。
- ・ 信頼関係を築いていく。
- ・ なぜ家族全体をアセスメントする必要があるのか、根拠を整理することができました。思春期の支援、本当

に難しいなど日々感じています。グループホームで苦勞されたことや、支援が組み立てられて良かったケースについて、事業所内で共有したいと思います。

- ・ ずっと頷くところが多く、わかりやすかったです。
- ・ 親の価値観が子どもに大きな影響を与えていること、子どもの視点からみた家族や家庭、支援者が親や関係機関とつながるための工夫について理解を深めることができました。
- ・ 実際に子ども(児童)支援をしている中で、家族支援の必要性を日々感じています。対応でき得る限り、一事業所で抱え込まず、支援する方も相談できる場所、面で支えていくを基にしていきたいと思います。
- ・ 面で支援をするという言葉が特に心に残りました。
- ・ 家族支援の重要性と難しさを改めて学ぶことができました。
- ・ 「二者関係」を幼児期から構築したいです。
- ・ 家族支援の必要性。子どもにとっての親の存在の大きさは絶大だと理解できた。
- ・ 子の支援のためには、保護者への厚い支援も欠かせないのだと感じました。
- ・ 「子どもが7歳なら親業も7年目」と心に留め置きながら日々の支援にあたっています。子どもが成長していくさまに親も成長し、家族も変わっていく、その伴走者が複数いてくれる社会が当たり前前の社会になって欲しいです。
- ・ 資料に沿ったお話でとても聞きやすかった。質疑応答の時間がもっとあると良かった。すごくためになった。

2. 今後、実際の業務で活かせる新たなつながりや、取り組みそうなことは見つかりましたか。

見つかった : 23名(88.5%)
見つからなかった : 0名
どちらも言えない : 3名(11.5%)

- ・ 他職種との連携や他の分野の視点からの情報やアドバイスを貰うことを学んだ。
- ・ 点ではなく、面で支援をしていくという点を共有することができて良かった。
- ・ 丁寧な聞き取り作業の大切さを理解できた。
- ・ 関係を築きながら支援の面を広げていきたいと思いました。
- ・ 先日、保護者面談で子どもが不登校でそのことについて心配でたまらないからとにかく話は聞いて欲しいが、こちらからのアドバイスは求めているようだった。今日、現実的な制度紹介の方が受け入れられやすいと言っていて、具体的なサービスや関係機関をもっと知り紹介できるようになりたい。
- ・ 躊躇していた所にも連絡を試みようと思った。
- ・ 子ども部門(子家セン)では、どうしても「子どもを守る」が前に出てきてしまいがちになるので、今一度、家族支援、親支援の必要性について皆で振り返りたいと思います。
- ・ 視点と関係機関のつながり、相談できるところ
- ・ 障害のある方も悩みをうまく言語化する力が足りずに生活に支障がでることがあります。子どもの場合は障害のある方とは異なる背景や事情があることをふまえて悩みや困りごとを把握していけたらと思います。
- ・ このような研修会、勉強会を関係機関と共有していくことが大事だと感じました。また、お互いに忙しいとは思いますが連携できるように努めていきたいと考えています。
- ・ 普段あまりかわりがないSWの方の話を聞いて、連携の形がイメージできました。
- ・ 多機関・多職種での連携、ひとりの支援員に抱えさせない体制を考える機会となりました。

- ・ わかっているが、進まない難しさを再認識しました。
- ・ 日々の取組の積み重ねを頑張ろうと思えました。
- ・ 多機関の事業内容を具体的に聞くことができ、参考になりました。
- ・ 市内の放課後等デイサービスの特徴や施設のカラ、独自性について確認していきたいと思います。
- ・ 家族支援の大切さと事業所内で共有したいと思った。

3. 児童分野と福祉分野の連携について、課題と感じていることはありますか。または、今後の研修で取り上げてほしい内容なテーマについて教えてください。

- ・ 児童から成人に変わる際にきちんと記録を引き継いでくれているか。記録に残っているかがわからず課題であると思う。
- ・ 児童養護施設を退所して成人の障害者グループホームに入居する人が非常に増えている一方で、児童分野との連携はなかなかできていないように感じられる。児童養護施設、児童相談所、子ども家庭支援センター、障害福祉サービスの支援者が集まり、現状把握や意見交換ができるような研修をぜひ実施していただきたい。
- ・ 支援や介入を拒否する当事者や家族への支援について。
- ・ 支援者会議や進学、卒業(就労)のタイミングでの引継ぎなど、事例も踏まえてお話を伺ってみたいです。
- ・ 今回のグループワークのような機会の場を用意していただけるといいと思いました。
- ・ 特別支援高校(不登校)を卒業後、どこの事業所にも入らず、就職せず、日中活動先が決まらず、引きこもりになっている方の支援。ご家族はどこか通所できるよう希望していた。福祉サービスを利用しないと相談員とも切れてしまう。支援高校は卒業後どこまでフォローがあるのか知りたい。
- ・ 思春期について、心理面、医学面、社会面いろいろな視点から学べるような場があると嬉しいです。
- ・ それぞれの分野を主戦場としている機関で集まり、それぞれがどのようなことをやっているのか、どういったことを考えながら支援しているのかを共有できる機会があるといいなと思います。
- ・ 相談時(要保護だけでなく)児童の子家センとのつながりは、とても大事だと感じております。小さな案件でも、つながっていければ良いのかなと(温度差があるのかな。)
- ・ 児童福祉サービス利用者の支援を引き継いだ経験がなく、児童福祉から障害福祉へ支援を引き継いだ事例についてお話をお聞きできたらと思います。
- ・ 思春期に関する研修
- ・ 児童と福祉については、パイプが細い気がします。こういった機会を通して、顔の見える関係性を築いていきたいと思います。
- ・ 教育との連携を取り上げて欲しいです。
- ・ 教育の中で(学校が)、福祉を見る視点の違いが課題です。
- ・ スクールソーシャルワーカーができる支援は、中学校卒業までです。中学校卒業後の支援メニューの充実がこれからの課題だと感じています。
- ・ 障害がある子の親への関わり。親が子どもの性格・個性とかで片づけたり、うちの子は違う、障害なわけがない、などで受入れ難かったり、その話題になると敵意をもったりする親が多い。気が付かないから困っていない。気にしていないというのもあり、どのように伝えたり他の支援につなげたりしたら良いのか難しい。
- ・ 今回のような質疑応答のみの会があっても良いと思った。

以上